

選者 川口孤舟

出句・選句

今井紀久男 柿崎忠彦 川口孤舟 熊谷くにお 久米五郎太 後藤とみ子  
 小早健介 在間千恵 佐藤ただしげ 朱牟田恵洲 高橋康敏 田島正己  
 土谷堂哉 豊田ゆたか 中川雅夫 西澤國護 長谷見びん 福島正明  
 古川百合子 古田昇 星田啓子 宮内規雄 山崎亜也 山内天牛  
 渡邊盛雄  
 伊賀山そらお 梅崎くすを 重枝考岳 庄司龍平 高橋清子 橋口隆  
 山本三恵 花伝亭長太楼(落語披露の後参加・長)

選句のみ

【互選句】○は会員選者の特選

◎は青葉会、孤舟選者の選

十三点 足るを知る夫婦ふたりの年用意

昇 (紀・くす・く・と・孝・清・康・ゆ・國・隆・び・百・盛)

九点 過疎村の空を狭めて大根干す

孤舟 (○く・千・恵・○康・堂・正・○昇・三・天)

◎膝小僧並ぶ足湯に冬至柚子

康敏 (そ・孤・と・孝・恵・○己・○允・三・盛)

八点 逢へぬ人面影浮かべ賀状書く  
 凧を風樹の嘆と聞きゐたり

忠彦 (そ・長・た・龍・雅・國・隆・盛)  
 孤舟 (○くす・健・清・康・己・雅・啓・亜)

六点 ◎別れあり出会いのありて年暮るる  
 ◎為すことのいささか多し暮れ早し  
 ◎久闊を叙することなく年逝けり

とみ子 (くす・健・孤・た・龍・百)  
 ゆたか (くす・孤・龍・國・び・規)  
 昇 (孤・龍・康・百・三・○盛)

五点 ◎時雨るるや北山杉の製材所

新薬師寺

康敏 (孤・く・恵・び・天)

伐折羅「バサラ」てふ神将在す闇寒し  
 瀬戸の海島影くつきり冬茜  
 病院で五泊六日の夜寒かな

堂哉 (紀・孝・昇・啓・亜)  
 ただしげ (紀・長・ゆ・昇・三)  
 全 (健・忠・と・正・規)

四点 義太夫に眠気催す開戦日  
 露天湯に憂さ流し切れぬ霜夜かな  
 ノーサイド鳴るを戦火に願えども  
 黙々と立ち食い蕎麦や冬の駅  
 妻恋し雲ひとつなき師走空  
 木枯らしやひしゃげし古伊賀銘はなし

五郎太 (紀・隆・雅・天)  
 健介 (と・己・ゆ・允)  
 國護 (長・千・ゆ・昇)  
 百合子 (くす・清・○正・天)  
 規雄 (く・○堂・國・○三)  
 亜也 (恵・清・正・○啓)

三点 漁火の沖に紛れて冬北斗

◎うつかりを齡のせいに冬薔薇

孤舟 (五・己・允)  
 とみ子 (孤・び・允)

豊満な三浦大根いかにせん  
 ラジオ体操蒲団にて聞く埒の無さ  
 ヴェール被り幼きマリア聖夜劇  
 鴉二羽夕日の中の木守柿  
 枯れてなほ己が葉鳴らす風知草  
 銀杏落葉再開発といふ手品  
 生牡蠣で祝ふ食卓パリ遠く  
 平和とふ危うき日々や冬木立

千恵 (隆・亜・天)  
 惠洲 (己・啓・亜)  
 康敏 (惠・昇・〇規)  
 びん (五・堂・啓)  
 全 (く・五・〇孝)  
 正明 (千・堂・亜)  
 亜也 (〇紀・國・正)  
 盛雄 (〇そ・忠・康)

二点

京都南座顔見世東西合同大歌舞伎  
 十三代目團十郎襲名披露「助六」

顔見世の格落ち芝居なめてをり  
 風邪の神二回訪れ居座りぬ  
 大木の銀杏落葉の輝く黄  
 脱穀の終えた田で鳥餌拾う  
 また一人減りて同期の忘年会  
 枯草に寝て仰ぐ空ノーサイド  
 学友のシヨパンや弾むクリスマス  
 また一つ熊手売れたる手締め之音  
 散紅葉名残惜しみつ炊く煙  
 木漏れ日やきらりひらりと銀杏降る  
 浮寝鳥平和に優るものは無く  
 ◎世界中の子らを笑顔に聖樹の灯  
 晴れ渡り晴れ渡りけり師走空

紀久男 (忠・た)  
 忠彦 (健・規)  
 千恵 (た・雅)  
 ただしげ (ゆ・規)  
 惠洲 (そ・忠)  
 正己 (紀・清)  
 堂哉 (紀・長)  
 國護 (忠・允)  
 全 (た・雅)  
 百合子 (長・ゆ)  
 正明 (五・百)  
 昇 (孤・と)  
 規雄 (千・百)

一点

泉鏡花作 玉三郎演出「天守物語」

師走歌舞伎のメはやつぱり玉三郎  
 背景を紫に塗る冬麗  
 口切の待合にある而今の字  
 義士会の演武のひとつ居合かな  
 鎮魂の花火三発開戦日  
 裸木に見るともなしに隣家見ゆ  
 ストープに弁当並ぶ六の一  
 蜜柑狩りはしやく仲間が喜寿まぢか  
 店先に並ぶ鱈の子冬夕焼け  
 うずくまりゆれる木ながむ寒き庭  
 ガスビルに昭和伝えるセロリかな  
 今どきの熊は冬眠せぬといふ  
 血圧の高きを忘る日向ぼこ  
 翔平を吾子のごとくおでん酒

紀久男 (盛)  
 五郎太 (孝)  
 全 (紀)  
 くに お (五)  
 全 (〇龍)  
 とみ子 (び)  
 堂哉 (千)  
 啓子 (紀)  
 全 (紀)  
 雅夫 (隆)  
 亜也 (堂)  
 天牛 (健)  
 盛雄 (そ)  
 全 (紀)



【句 評】

十三点句 足るを知る夫婦ふたりの年用意 昇

康敏さん・・・「足るを知る」（知足者富）は老子の言葉。慎ましく幸せそうな夫婦が目に見え。浮かぶ。

ゆたかさん・・・つつましいご夫婦の日頃の様子がうかがえます。  
百合子さん・・・長年連れ添ったご夫婦の穏やかな姿が目に見えました。

九点句 過疎村の空を狭めて大根干す 孤舟

くにおさん・・・たくあん用の大根を干しているのでしょうか。「空を狭めて」と少しオーバーな措辞が上手いですね。ただこれは「過疎村」を「過疎の村」として下五に、「大根干す」を上五に語順を変えたらどうでしょうか。  
千恵さん・・・人があまり住んでいないはずなのに何故か大根がたくさん干されている。それが結構空を埋めている現象。そこにはちゃんと人が生活しているという現れなんです。

恵洲さん・・・過疎の村と言えど豊作の大根を景気よく干している心意気  
康敏さん・・・若者のいない村で、お年寄り達が腰をのばして一斉に大根を干している。  
昇さん・・・過疎村の寂しい空と干し大根の賑やかさの対比が鮮やか。青空に大根の白さが目に沁みます。俳味のある句ですね。

天牛さん・・・だんだんこんな情景が少なくなりました。懐かしいです。

膝小僧並ぶ足湯に冬至柚子 康敏

孤舟選者・・・湯に浸された大根足の周辺に、小さな香り高い柚子が浮いている。  
とみ子さん・・・足湯に足と柚子が混み合っている様子が、面白く思いました。

恵洲さん・・・足湯でも柚子湯にしてくれるところが嬉しい。  
正己さん・・・ぎつしり並んだむさくるしいくらい膝小僧、少し熱めの温泉のもうもうとした湯気、ゆずの鮮やかなレモン色が相まって、まったくこの時期懂れの「ほっこり、ぽかぽか」を思い描けますね。

允章さん・・・真っ白な足と黄色の柚子の取り合わせ、楽しそうです。

八点句 逢へぬ人面影浮かべ賀状書く 忠彦

ただしげさん・・・その人を思い出し、一言を添える。

風を風樹の嘆と聞きむたり 孤舟

康敏さん・・・風が木々を揺らす音を「風樹の嘆」（「孝行をしたとき時分に親はなし」と聞いた。作者の心中の嘆きでもあろう。

参考「虎落笛風樹の嘆の如きもの 長谷川双魚」

亜也さん・・・親不孝のわが身には耳の痛い話。

六点句 別れあり出合いのありて年暮るる とみ子

孤舟選者・・・出合いよりも別れの方が多かったこの1年もまもなく暮れようとしている。  
ただしげさん・・・正に出会いと別れがあり、一年が暮れて行く。どこかに寂しい気持ちがある。

百合子さん・・・まさしく今年がそうでした

為すことのいささか多し暮れ早し

ゆたか

孤舟選者……若い時ほどテキパキと事を済ますことが出来ず、徒に時間の経つのが早い。

注意点（暮れ早し） ↓ 俳句では、暮に送り仮名は付けません。暮早し）

久闊を叙することなく年逝けり

昇

孤舟選者……永年会いたいと思っていた友が急逝してしまった。

康敏さん……「今年こそ会おうよ！」年賀状に何年書き続けてきたことか。

百合子さん……年々一年が短くなり、今年も気懸りをそのままに年を送ります。恥ずかしながら「久闊を叙する」調べて、なるほど、同感！

三恵さん……「久闊を叙する」という表現を知ることができました。

## 五点句

時雨るるや北山杉の製材所

康敏

孤舟選者……北山杉の産地 京都北区中川近辺には時雨がよく似合う。

恵洲さん……時雨の中、のこぎりの音と、切屑からの木の香の頭つ初冬の製材所の雰囲気をよく写している

びんさん……飽く迄垂直な京都の北山杉。昔は奥瀬の峡谷を筏師が命がけて下ろしたそう。その皮褰の筋を磨上げる古典的な情熱。いま製材所の材木置場で冷たい雨に濡れている北山杉。

天牛さん……製材所いっぱい処理したスギの材木の臭いで満ち溢れているのがわかります。

新薬師寺

伐折羅「バサラ」てふ神将在す闇寒し 堂哉

亜也さん……廠かな空間が眼前にありありと浮かびます。

瀬戸の海島影くつきり冬茜

ただしげ

ゆたかさん……瀬戸の海の一刻の鮮やかな景色がとらえられて見事です

病院で五泊六日の夜寒かな

ただしげ

とみ子さん……「夜寒かな」が、我が家に帰りたいという想いを語っています。

## 四点句

義太夫に眠気催す開戦日

五郎太

天牛さん……幾つの方の句でしょうか。開戦日のとらえ方が全く違うので驚きました。

紀久男……戦時中の大本営発表、軍艦マーチ。対照的な客もまばらな人形浄瑠璃とで面白い取り合わせです。昭和50年ごろの道頓堀の中座や朝日座を想起しました。

露天湯に憂さ流し切れぬ霜夜かな

健介

とみ子さん……流しきれぬ憂さも露天湯が、癒してくれるでしょう。

ゆたかさん……日頃の鬱陶しいお気持ち伝わってきます

ノーサイド鳴るを戦火に願えども

國護

ゆたかさん……全く同感です

※康敏さん……※ラグビーは季語ですがノーサイドは季語ではありませんね。

黙々と立ち食い蕎麦や冬の駅

百合子

正明さん……寂しくて寒そうですね。

天牛さん……出張に行った地方の駅での経験を思い出します。

妻恋し雲ひとつなき師走空

規雄

くにおさん……下五の「師走空」は「師走かな」ではだめでしょうか。

三恵さん・・・自分の心は、妻に会いたくて寂寥感に沈んでいるというのにふと見上げる  
と冬空には一点の曇りもなく、癩に障るくらい清々しい。かえって妻への  
恋しさが募っていく、と勝手に解釈しました。俳句ならではの心情の投影  
が好きです。

木枯らしやひしゃげし古伊賀銘はなし 亜也

恵洲さん・・・銘の無い古伊賀のひしゃげたのと、季語木枯らしの取り合わせがよい。

正明さん・・・佳作。寂しくて品があります。

啓子さん・・・独特な形の古伊賀の花入れや水差し。銘がないものの名品か。季語の斡旋が  
流石です。

### 三点句

うつかりを齡のせいに冬薔薇

とみ子

孤舟選者・・・「うつかり」は齡の所為ではなく認知症の現れかも知れない。

豊満な三浦大根いかにせん

千恵

亜也さん・・・「豊満」と「いかにせん」の組合せであらぬことも思わせて妙。

天牛さん・・・豊満で何事かと驚かせる、人を喰った句ですね。

ラジオ体操蒲団にて聞く埒の無さ

恵洲

啓子さん・・・どなたにも経験のある景ですが、下五の措辞が何とも言い難い気分を言い  
得ていると思います。

亜也さん・・・日常語ではなくなっている「埒もない」に好感。

ヴェール被り幼きマリア聖夜劇

康敏

恵洲さん・・・幼い時に通った日曜学校のクリスマススを思い出させてなつかしい。

規雄さん・・・クリスマス発表会の、園児等の嬉々とした笑顔が目に見えるようです。そん  
な俳句です。いいですね。

鴉二羽夕日の中の木守柿

びん

五郎太さん・・・絵ような静謐な冬の夕景を頂きました。

枯れてなほ己が葉鳴らす風知草

びん

孝岳さん・・・風知草は夏の盛りを過ぎて冬枯れてしまった己の葉を鳴らして「老いて尚、  
しばらくは気力ある人生を社会貢献の為に使え。」と僕に言っているように  
感じます。

銀杏落葉再開発といふ手品

正明

千恵さん・・・自然を壊してまで再開発は人々に快適を与えるなどというまやかしは嫌で  
すね。

亜也さん・・・「手品」に込めた慨嘆・批判。

生牡蠣で祝ふ食卓パリ遠く

亜也

正明さん・・・佳作です。

平和とふ危うき日々や冬木立

盛雄

そらおさん・・・世界の異常天候と戦乱の絶えない今年も暮れようとしています。日本も政治  
も異常です。大谷君の明るさだけが救い。

康敏さん・・・日本は地政学的に見て、かなり危険な位置にある。冬木立の間から見える未来  
は？

二点句

京都南座顔見世東西合同大歌舞伎

十三代目團十郎襲名披露「助六」

顔見世の格落ち芝居なめてをり

紀久男

ただしげさん・・・少々きつい表現だが、理解できる。

※紀久男（自句自解）菊五郎・菊之助等音羽屋一門は出演無し。東京組は團十郎一家のみ。成田屋の借金の闇が想起されます。玉三郎や菊之助の揚巻役が智太郎では荷が重い。

脱穀の終えた田で鳥餌拾う

ただしげ

ゆたかさん・・・田圃の一刻の景色が目には浮かびます。

散紅葉名残惜しみつ炊く煙

國護

ただしげさん・・・暮れ往く秋の情感がよく分る。尚、「炊く」は「焚く」では？

木漏れ日やきらりひらりと銀杏降る

百合子

ゆたかさん・・・きらりひらりの表現が素晴らしいです

浮寝鳥平和に優るものは無く

正明

五郎太さん・・・続く戦争、平和が第一。何羽もの鳥が水にのどかに浮かんでいる。

百合子さん・・・浮寝鳥が雄弁に訴えかけてきました

世界中の子らを笑顔に聖樹の灯

昇

孤舟選者・・・子供達が世界各地の紛争の犠牲者にならないよう祈りたい。

とみ子さん・・・聖樹の灯に、希望を託したいですね。

晴れ渡り晴れ渡りけり師走空

規雄

千恵さん・・・冬の日、時にどこまで蒼いんだって位雲もなく空が真つ蒼な時がありますね。ちよつと感動。

百合子さん・・・リフレインが効果的ですね

一点句

義士会の演武のひとつ居合かな

くにお

五郎太さん・・・四十七士の墓前にこの日は線香が絶えることがない。珍しい光景にであつたようですね。

鎮魂の花火三発開戦日

くにお

龍平さん・・・目下吉村昭「陸奥爆沈」を読書中。昭和二年の月八日 山本五十六元帥葬儀の日後。呉軍港の近く。誰が沈めたか？ 我は荻窪の国民小学校一年生。遠いあの頃がジイジになると意外に鮮明に。

店先に並ぶ鱧の子冬夕焼け

啓子

紀久男・・・季重なりですが。

※康敏さん・・・鱧子（冬）と冬夕焼けの季重なり。「店先に並ぶ鱧の子夕日影」

うづくまりゆれる木ながむ寒き庭

雅夫

※康敏さん・・・動詞が三つもあると散文的になります。俳句は韻文です、詩です。「一句一動詞」を目指すべきでしょう。



【次回 青葉会】

2024年1月25日（木） 13時より青葉会句会 於：丸紅本社 4階会議室

参加者は出句5句、ご投句は2句を目処としてご提出ください。

締め切りは、1月23日（火）中。編集の星田啓子までお送りください。

※※※※※※※※※※※※※※※※

### 【青葉会報】

一、今回は一年の締め括り、納句会でもあり、関西から堂哉さん、普段はご投句だけの昇さんも参加されるなど十三名が出席。句会冒頭に、丸紅OBで社会人落語家の花伝亭長太楼（大滝長孝）氏に一席ご披露戴きました。その後、落語の大滝氏も選句に入っていたいただき、選者は孤舟さん、進行役はいつもの五郎太さんでご出席者の選句への披講など賑やかな句会となりました。今回は時間的に幾分余裕がないと考えられるところから、出句を少なめに募集させていただきました、25名の句でした。結果はご覧のように、たいへん久し振りのご出席だった昇さんが目覚ましく、それに孤舟選者、康敏さんが続きました。

二、その後の青葉会忘年会は、近くの銀座アスター三軒茶屋賓館にて開催、懇親を深めました。今年ご入会の、百合子さん、正己さんも句会は難しくも忘年会だけは、とご参加いただき、一年ぶりの恵洲さんも駆けつけられ、孤舟選者のご挨拶に始まり、新人のお二方の自己紹介をお願いしたり、席を移動したりと、十五名の方々がざっくばらんな会合となりました。

### 三、【孤舟選者近詠】

王朝の色を極むる鳥兜 熟柿挽ぐたび碧空を傾けて  
ひと息に日の沈みゆく薄原 冬夕焼ミレ一の晩鐘聞こえくる  
月山も鳥海山もしぐれけり

### 四、【関係者近詠】

自史に横道はあり冬木の芽	盛雄	今届く十光年冬銀河	健介
哀歓充つ空港ピアノ冬銀河	全	目を病めりあのオリオンさへ瞬かず	全
静かなる狭庭の灯り石露の花	全	小春日や本場神戸のジャズ横丁	全
夜遊びの帰路の真上に冬銀河	全	小林光一先輩追悼（元大阪機械本部長）	
平和とふ 危うき日々や冬木立	全	万葉集片手にぬる爛一升呑みし頃憶ふ	紀久男
冬場所の一瞬の技や星動く	全	終活すませ従容と畏友秋に逝く	全

————— きさらぎ 十二月号 —————

令和五年十二月吉日

（了）